綾　史郎．1999．淀川ワンドの形成と変遷．わんどの機能と保全・創造—豊かな河川環境を目指して．わんど懇談会（編），pp. 41–78．河川環境管理財団大阪研究所，大阪．
氷見市教育委員会．2006．イタセンパラ天然記念物再生事業報告書II．富山，31 pp.
Kafuku, T. 1958. Speciation in cyprinid fishes on the basis of intestinal differentiation, with some references to that among catostomids. Bull. Freshwater Fish. Res. Lab., 8: 45–78.
河合典彦．2008．淀川の河川構造改変がもたらしたシンボルフィッシュ・イタセンパラの盛衰．遺伝，62: 78–83.
宮下敏夫．1996．人工飼育時における適正餌料—イタセンパラの増殖技術開発試験II．平成6年度大阪府立淡水魚試験場業務報告，pp. 120–124.
中村守純．1969．日本のコイ科魚類．資源科学研究所，東京，455 pp.
小川力也・長田芳和．1999a．河川敷氾濫原のシンボルフィッシュ—イタセンパラ．森　誠一（編），pp. 9–18．淡水生物の保全生態学．信山社サイテック，東京．
小川力也・長田芳和．1999b．イタセンパラの生息環境から見た淀川水系の変遷とその保全・復元に向けて．森　誠一（編），pp. 223–239．淡水生物の保全生態学．信山社サイテック，東京．
小川力也・長田芳和・紀平　肇．2000．淀川におけるイタセンパラの生息環境（総説）．大阪教育大学紀要，49: 33–55.
大阪府．2007．環境省国内希少野生動植物種保護増殖事業（イタセンパラ）—平成12–17年度イタセンパラ保護増殖事業報告書．淀川水系イタセンパラ研究会（編），大阪，308 pp.
Uehara, K., K. Kawabata and H. Ohta. 2006. Low temperature requirement for embryonic development of Itasenpara bitterling *Acheilognathus longipinnis*. J. Exp. Zool., 10: 1–7.
淀川環境委員会．2002．自然豊かな淀川をめざして—資料編．国土交通省近畿地方整備局淀川工事事務所，大阪，86 pp.

（小川力也　Rikiya Ogawa: 〒553–0007 大阪市福島区大開2–17–62　大阪府立西野田工科高等学校・淀川水系イタセンパラ研究会　e-mail: ogawar@silver.ocn.ne.jp）

# 書評・Book Review

魚類学雑誌
55(2): 148–149

**リンネと博物学—自然誌科学の源流—［増補改訂］．**—千葉県立中央博物館（編）．2008．文一総合出版，東京．xxviii+298 pp. ISBN978-4-8299-0129-8．15,000円（税別）．

我々人間は，あらゆるモノに名前をつけて他人とコミュニケーションをとっている．ただし，それらの名称の多くは国や地域によって異なり，互いに異なる国や地域の人同士が意思疎通を図るには現在では英語を用いるのが普通だ．一方，生物はどうであろうか．もちろん，生物にも国や地域によってそれぞれ独自の名前（俗名，地方名や各国内の標準名）がつけられているが，ラテン語で表記される全世界共通の学名というものがある．現在，ラテン語を母国語としている国がないことから，学名は言語として変化しない安定性をもっている上に，どの国の人にとっても公平である．この学名に関わる様々な基本ルールを考え出したのがスウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネ (1707–1778) である．「近代生物分類の父」と呼ばれるリンネは，生物学の歴史上の人物としては，今や進化論のダーウィンと並んで有名であろう．しかし，分類体系の基礎を築いたという以外にリンネ自身のことや彼の業績ついて詳しく知っている人は少ないのではないだろうか．（動物）分類学の専門家でさえ，（動物の）学名の基点となるリンネ著『自然の体系　第10版』を読んだことがある程度だと思う．

リンネ生誕300年を記念して千葉県立中央博物館から発行された本書は，14年前に同館から出版された特別展図録『リンネと博物学：自然誌科学の源流』（1994年8月21日刊行）をベースにした増補改訂版である．同館には5,000点を越すリンネ関係の貴重な資料が所蔵されており，本書はそれらを多くのカラー図版を用いて惜しげもなく掲載している．科学的，文化的に価値が高いオリジナル資料を眺めるだけでも気分がよいが，本書の内容の濃さにも圧倒される．以下，本書を目次にそって紹介するが，この書評が『魚類学雑誌』に掲載されることから，動物学関係の記事を中心に述べ，植物学に関する記事は簡単に触れる程度とする．

本書の第1章が始まる前に，ロンドン・リンネ協会における天皇陛下のリンネ生誕300年記念行事基調講演(2007年5月29日)「リンネと日本の分類学」の全文が英文と和文で13ページに渡って掲載されている．リンネと日本の関係，学名が日本で最初に使用された本の話などが事細かに記されており，非常に興味深い内容である．もちろん，ご専門のハゼ科魚類の研究についても述べられている．この後，千葉県知事と千葉県立中央博物館館長のことばが掲載されているが，xxiiiページ下から4行目の1935は1735の誤りだと思われる．

さて，続く本文に進むと，第1章「リンネのしごと1」には東アジアに1冊しかないという『自然の体系（初版）』オリジナル版の全ページがカラーで紹介されており，さらに各ページの日本語訳が付されている．『自然の体系（初版）』のオリジナル版をみる価値に加え，それを日本語で読むことができるという二重の喜びに浸れる内容である．また，日本語訳にくわえ詳しい解説もなされており，訳だけでは曖昧な部分も深く理解できるようになっている．たとえば，『自然の体系（初版）』の表紙のカラー写真（4ページ）の日本語訳（5ページ）の下に，表紙に書かれている内容の解説がある．一例として紹介すると，表紙の著者名に関する解説では，「スウェーデン人としての氏名Carl Linnéをラテン語化してCarolus Linnaeusと称した．語尾変化をするとCaroli Linnaeiとなる．1762年，スウェーデン国王により貴族に列せられてから，Carl von Linné（カール・フォン・リン

ネ）を好んで使った．ただし，近年の分類学者は種の学名の命名者としては"Linnaeus"を多く使っている」とあり，解説の丁寧さが分かる．『自然の体系（初版）』の魚類に関する記述に注目してみると，本書の日本語訳から，リンネが魚類学者Petrus Artedi博士の分類体系を踏襲していることがよく分かる．なお，『自然の体系（初版）』の動物界には36属の魚類がリストされている（本書34ページ）．

第2章「リンネのしごと2」には，千葉県立中央博物館に所蔵されているリンネ関連文献90点やリンネ自筆の書簡2通がカラー写真と解説で紹介されている．書簡は2通ともフランス・モンペリエ大学の教授の有毒植物についての質問に答えた長文の手紙であるが，この手紙については日本語訳が載っていない．個人的にはリンネの手紙の書き方や内容に興味があるので，訳がないのは残念だ．本章で紹介されているリンネ文献の中で魚類に関係するのは，『スウェーデン動物誌（初版）』で，『自然の体系（第10版）』に先駆する1749年に出版されている．スウェーデンの魚類を含む動物相を二語名法によりまとめた大著で，多くの新種が記載されている．やはり植物関係の文献が多いのだが，毛色の変わった論文も紹介されている．たとえば，喫茶の習慣についてのリンネとティレウス著『喫茶』や，コーヒーの飲み方や貿易，医学的効能についてのリンネとスパールシューフ著『コーヒーの飲用』など，医者として，博物学者としてのリンネの知識の広さが伺える．

第3章「リンネコレクションから」では，リンネおよびリンネに関係する出版物の図版がカラーで，かつ贅沢にも1図版につき1ページをさいて掲載されている．学術的というより，美術的な価値が高そうな気がする．ここでは62枚の図版が掲載されているが，やはり植物画が多く，動物は昆虫が3枚，鳥類が3枚で，魚類の図版はない．また，本章の終わりには，千葉県立中央博物館に所蔵されている，リンネと関係者のメダルがカラーで42種掲載されている．

ここまで，第1章から3章までは，図版と解説を見ながら楽しむ内容であるといえるが，第4章「自然誌科学の源流，リンネ」は読み物として楽しむ内容になっている．13編の非常に充実したリンネに関する総説からなり，本章だけを製本してもりっぱな本になるほどの価値がある．各総説には多数の写真と詳細な表が盛込まれ，また引用文献も充実している．ここでは紙面の制約上，各総説のタイトル，著者，ページのみを列記する．「最高のナチュラリスト，リンネ—その最大の寄与，植物分類体系と学名の確立—（木村陽二郎）pp. 183–193」，「分類学の黎明期における生物分類と種概念—リンネとアダンソンの分類理論を中心に—（直海俊一郎）pp. 195–209」，「植物分類学の始祖としてのリンネと種名のタイプ（大場秀章）pp. 211–215」，「植物と動物の学名について（天野　誠）pp. 217–224」，「リンネと医学（梶田　昭）pp. 225–230」，「リンネと生態学（沼田　眞）pp. 231–236」，「リンネと昆虫学（小西正泰）pp. 237–244」，「リンネと鳥類学（桑原和之・茂田良光）pp. 245–246」，「リンネと藻類学—17～18世紀における藻類Algaeの認識—（宮田昌彦）pp. 247–256」，「リネーとロシアの博物学者—リネー—ラックスマン父子—大黒屋光太夫—桂川甫周（国瑞）（小原　敬）pp. 257–262」「リンネゆかりの旧クリフォート邸を訪ねる（大場秀章）pp. 263–268」，「ロンドン・リネアン・ソサエティー：その歴史と現状（大場秀章）pp. 269–274」，「ロンドン・リネアン・ソサエティー訪問記（林　浩二）pp. 275–278」．

本書の末尾には2つの「資料」が付記されている．まず，「リンネ関係年表」では，リンネに関わる事象の年表に，その時に起こった世界と日本での出来事が併記されており，リンネの活躍した時代背景を理解するのに有益である．たとえば，リンネが誕生した年は，日本では富士山が噴火した年でもあり，リンネが死去する2年前はアメリカ合衆国が独立した年でもあることが分かる．次の資料として，リンネ編『学問のたしなみ（初版第9巻）』の巻末を元に作成された「リンネが授与した学位・口述論文タイトル一覧」が掲載されている．ここには，186編の論文のタイトル（原文と和訳），その発表者（リンネの学生）183名の名前と出身地，発表年月などが列記されている．このあらゆる分野を網羅した論文タイトル一覧をみると，改めて博物学者としてのリンネの偉大さに気づかされる．

このように，本書はリンネやその関係者たちに関わる千葉県立中央博物館所蔵のリンネコレクションの紹介にとどまらず，リンネの業績についてさまざまな視点から論考されており，さらにはよく整理された詳細な資料がふんだんに詰め込まれている．価格は若干高いが，それに見合うだけの内容がある本である．大学関係者は講義の資料としても本書を活用できるのではないだろうか．分類学を専門としている研究者はもちろんのこと，各図書館や博物館にも1冊は置いておきたい本である．

（本村浩之　Hiroyuki Motomura: 〒890–0065 鹿児島市郡元1–21–30　鹿児島大学総合研究博物館　e-mail: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp）

---

魚類学雑誌
55(2): 149–150

**水族館の仕事**　—西　源二郎・猿渡敏郎（編著），2007．東海大学出版会，秦野．245 pp. ISBN978-4-486-01770-7．3,200円（税別）．

ここ数年，水族館の仕事や役割，見所などを紹介する書物が多数出版されている．本書もそのうちのひとつであるが，水族館の魅力や役割などが丹念に紹介されているだけではない．

本書は6部15章で構成されている．まず水族館の仕事の代表例として飼育係の業務全般が紹介されている（第1部）．次いで私たちが目にする水生生物の展示がどのように行われているのか，展示生物の確保と水族館への搬入から，それを飼育するための設備の話，さらには飼育水を良質に維持するために不可欠な濾過バクテリアについて，わかりやすく，かつ学術的トピックスを交えて解説されている（第2部）．これらの話題に続く第3，4部では，飼育員が南極や北極といった極寒地で遂行する展示生物の採集や，サンマやイセエビ，クラゲ，深海魚など，飼育が非常に困難な生物に対峙し，なんとかそれらを状態よく飼育し，多くの人々に見てもらえるように努力した経験が記されている．飼育員の仕事，いや，仕事という枠を超えて，生物の飼育や展示に日々傾けた情熱が伝わってくる．第5，6部では，水族館が取り組む環境保全活動や教育活動が紹介され，水族館がただ単に水生生物を展示している娯楽施設などではないことがよく理解できる．また，水族館と研究機関あるいは教育機関が協働する際の参考にもなるだろう．

本書の意図は，水族館が，水生生物の保護や研究，教育啓発活動を担う総合的な生涯学習機関であることを読者に認識してもらうことにあるという．たしかにその意図は果たされていると思うが，私はそれ以上に，水族館で働きたいという希望をもつ人が水族館の可能性や水族館で働くことの現代的な意義をさらに深く考えるための貴重な情報源のひとつになっていると思う．本書は，水族館で働く魅力を生き生きと読者に語りかけてくる．水族館に勤務している全ての人が自分の望む仕事を担当できるわけではないだろうが，希望業務を担当することができれば，情熱次第でかなりのことができることが読み取れる．そういった意味で，水族館に興味のある読者はもちろんのこと，水族館勤務を望む人にとくにお勧めしたい．

最後に，編者によれば，水族館での様々な研究活動に焦点を絞った姉妹書の出版を準備中であるという．そちらの出版も楽しみに待ちたい．

（荒山和則　Kazunori Arayama: 〒311-3512 茨城県行方市玉造甲1560　茨城県内水面水産試験場　e-mail: arakichi@ignaisuishi.ecnet.jp）

# 図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
55(2): 150

**水辺の小わざ．**—「水辺の小わざ」プロジェクトチーム（著）（濱野龍夫・伊藤信行，編）．2007．山口県土木建築部河川課，山口．256 pp．2,500円（税込・送料別）．本書は，独立行政法人水産大学校の濱野氏と山口県土木建築部河川課の伊藤氏を中心とした「水辺の小わざ」プロジェクトチームの2年間の成果を纏めたもので，河川の生態系を保全復元するための山口県版，安価な工法・工夫事例集である．それにとどまらず，河川区分，水質，生物，環境，漁業などの解説を加え，総合的な川のハンドブックとなっている．「小わざ」ながら，いい所の拾い取りをできるものが少なくないはず．山口県土木建築部によるサイト http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a18600/kawadukuri/kowaza.html または水産大学校研究室HPのサイト http://www2.fish-u.ac.jp/LAIZ/topics/kowaza/に解説と申込方法，申込用紙があるので，ファクスにて山口県刊行物普及協会（083-923-9139）に申し込む．（酒井治己）

**種を記載する—生物学者のための実際的な分類手順—．**—ジェディス E. ウィンストン（著），馬渡峻輔・柁原　宏（訳）．2008．新井書院，東京．653 pp．ISBN978-4-903981-00-0．7,800円（税別）．本書は1999年に出版されたJudith E. Winstonの「Describing species: practical taxonomic procedure for biologists」の訳本で，「序論」，「種を認識する」，「種の記載の執筆」，「種の記載を超えて」の4部から構成されている．本書では新種記載の基本的な手順を，新種の発見から文献調査，分類学的考察，記載，そして出版にいたるまで丁寧に説明してある．記載例では原書の英文を残して日本語の記載と対応させているため，実際の記載方法が理解しやすい．また，最終部「種の記載を超えて」には「亜種」・「属レベルの記載とリビジョン」・「検索表」などの章が設けられ，単なる種の記載を超えた，発展的な内容が含まれる．各章の参考文献は事項別にまとめられ，インターネットのサイトなども紹介されている．したがって，必要な情報に容易にアプローチできる．種の記載の実際が基礎から応用まで理解でき，分類学に携わる学生にはおすすめの1冊である．（片山英里）

# 会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
55(2): 150–152

## 新知見紹介

### 有明海で採集されたコウライマナガツオ
### *Pampus echinogaster* caught in Ariake Sound, Kyushu

写真の魚（図1）は，有明海奥部の六角川河口で“あんこう網”（潮待ち網の一種）を操業する佐賀県白石市（旧小城郡芦刈町）在住の陣川武彦氏によって1999年9月28日に漁獲された，尾叉長301 mmのコウライマナガツオ *Pampus echinogaster* である．同氏から，マナガツオ *Pampus punctatissimus* とは形態の異なる類似種がときおり漁獲されることを聞き，確認のため標本採集を依頼した筆者の一人の求めに応じて提供されたものである．この標本は，中坊 (2000) がコウライマナガツオの特徴として記しているとおり，波状のリッジ域が後頭部にしか形成されていない．また，有明海で多く漁獲されるマナガ